

# 潜在的な実力を生かして にぎわい復活にチャレンジ

## 真夏に躍動する 学生トライアスロン大会

夏まだ真つ盛りの今年9月2日(日)、観音寺市の瀬戸内海に面した市域一帯で「2012日本学生トライアスロン選手権観音寺大会」が開催された。同大会は全国7ブロックの予選を勝ち抜いた男女約200人の選手が出場。学生トライアスロンの大会としては国内最大規模で、カテゴリーとしても最上位に位置付けられている。観音寺市では6年連続の開催で、半ば恒例行事と化した感がある。

日本学生トライアスロン選手権の前日(9月1日)には、これも恒例となった「観音寺キッズトライアスロン」が開かれ51名の小学生が参加する予定であったが、残念ながら今回は雨天中止となった。

日本学生トライアスロン選手権・女子の部は午前10時スタート、男子の部は午後1時か

らのスタートである。選手はまず瀬戸内の風光明媚な1周750mのスイムコース(有明浜)を2周し、県道丸亀詫間豊浜線のコースをバイクで40km走破、続けて琴弾八幡宮や四国八十八ヶ所に数えられる名刹・神恵院(六十八番)、観音寺(六十九番)などを含む地区の周囲2.5kmの琴弾公園周回コースを4周、計10kmを走る(ラン)。

総延長距離51.5km。観音寺大会が始まって以来の定番となっているコースだが、日本学生トライアスロン選手権の開催が観音寺市で6年間も続いている背景の一つには、このコースの優位性がある。

「選手たちにとってはスイム、バイクと続いて最後のランが体力的にも精神的にも一番きついわけですが、観音寺のランコースは全体に緑の多い地区で、中でも各周回の最後は有明浜に続く松林の中を走ることになります。目に映る風景が柔らかく、まちなかより涼しいために、心底ホッとするといいです」



しらかわせいじ  
白川晴司  
観音寺市長

そう語るのは白川晴司・観音寺市長だ。これはマラソン大会にも言えることだが、より一層体力的に過酷なトライアスロン大会の場合にはなおさら、まちの風光の美しさは、参加選手たちに心理的な効用を与えることだろう。

それと同時に、沿道で応援する市民の多さや歓迎ぶり、大会運営そのものの完成度なども含めた総合的な体制の良し悪しは、こうした大規模なスポーツ大会の成否には大きく影

響してくる。

毎回延べ約1000人もの市民がボランティアで開催を手伝い、老若男女が沿道を埋め、盛大な拍手や歓声を送り続ける観音寺市のサポート体制は大会主催者の日本学生トライアスロン連合からも高い評価を得ている。「大会期間中とその前後は、参加選手だけ

でなく、関係者、全国各地からの応援団など総計400〜500人もの若い方たちが観音寺市を訪れ、泊まっていられます。その期間は、高齢化率の高い観音寺市が実に華やかに若やぎます(笑)。だからこそ余計に市民が一体化して、心からのサポートや応援をすることができるとは思います。いつまで続けていただけたらいいのですが、観音寺市で開催していただける限り、私たちは全力でサポートをするつもりです(白川市長)

## 交流定住人口の 増加に向けた懸命の努力

さらに白川市長は「大会にいられた若い方たちがそのまま定住してくれたらどんなにいいことかと、トライアスロン選手権のたびに思います」と苦笑する。観音寺市もまた全国に数多い人口減少化に悩む都市の一つである。さまざまな定住促進施策を打ち出し、取り組みつつあるが、決定的な打開策にはまだ巡り合っていない。

観音寺市の交流定住促進事業は、平成17年10月の合併(旧観音寺市、大野原町、豊浜町)により誕生した新観音寺市が、平成20年3月に策定した総合振興計画に基づいて本格化した。合併当時の人口は6万5226人だったが、平成22年度の国勢調査では6万2690人に減少している。各地区とも同じように毎



今や市民の宝である「日本学生トライアスロン大会」



六十八番札所神恵院および六十九番札所観音寺



市街地の至る所に鎮座する和泉正敏氏制作の石彫

するなど、観音寺市への定住を期待する「婚活事業」も随時行っている。  
「それ以外にも香川県移住・交流推進協議会によるUターン、Iターン事業なども行われておりますが、交流定住促進制度の策定やイベントの実施などもさることながら、最も大切なのはそれぞれのまち独自の「にぎわいづくり」や、総合的な魅力アップだと考えます。さらにその前提として、特に四国では全国的にも脆弱性が指摘される交通インフラの整備が喫緊の課題だと思います」(白川市長)

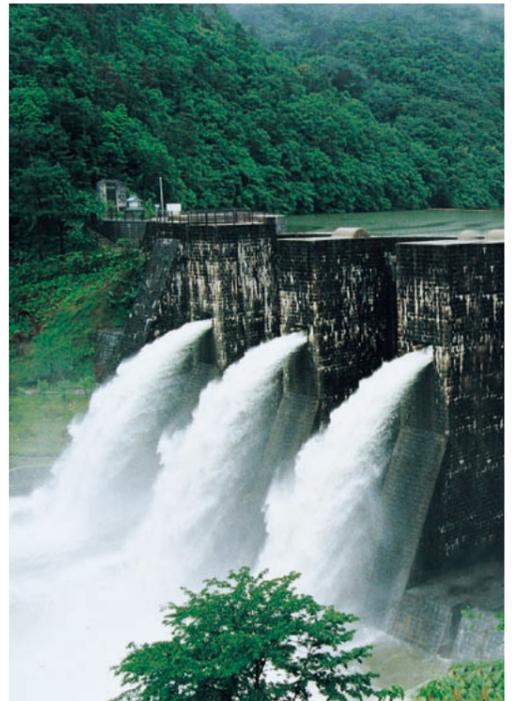


コミュニティ活性化に不可欠の地域サロンの目的は世代を超えた交流

年漸減しており、観音寺市としては総合振興計画の目標年次である平成29年度の人口目標を「6万人維持」に置いている。  
そのために行うべき課題として「出生率向上」「空き家対策」「定住人口増加」「都市住民との交流」を挙げ、結果として若年層の定住と交流人口の拡大に結び付けられればと期待している。  
定住促進のための主な助成制度は次の通りだ(平成23年度)。

### ・制度① Iターン者住宅新築等助成金(平成23年度～26年度)

対象者は「Iターンなどで住宅を新築、または購入した人で、本人および世帯員全員が新たに観音寺市の住民基本台帳に記載される人」で、新築の場合は期間中に工事契約をし、平成27年1月1日までに居住しなければならぬ。また住宅購入者は平成26年3月31日までに転入し居住できる人。助成額は土地購入費以外の住宅部分の建築・購入費の5%。



巨大なダム式ため池「豊稔池」(大正15年建設、重要文化財指定)

### ・制度② 住宅あっせん等助成金

対象者は「Iターン者住宅新築等助成金の対象者に対し、住宅または住宅建築のために取得する宅地を売却または媒介した、宅地建物取引業者」で、1件につき5万円を助成(1あっせん業者につき年間10件までの上限あり)。

平成23年度はこの制度によって、5世帯(13名移住)が助成を受けている。

そのほか、公益社団法人・香川県宅地建物取引業協会の協力により、空き家を登録して、外部からの問い合わせにマッチングをする「空き家バンク制度」(平成23年1月)がある。この制度によって平成23年度中に登録さ

## 四国のまんなか・観音寺の潜在的実力

高速自動車交通網はある程度、四国を網羅しているだけに、これからは「特に鉄道網の再整備に目を向けるべきだ」と白川市長は強調する。

折しも平成23年12月からは、JR四国・予讃線でフリーゲージトレイン(軌間可変電車)新幹線と在来線など軌間が異なる車両が同じ軌道を走れるよう、ゲージを自動調節する電車)の耐久走行試験を実施している。急曲線の多い予讃線では既に通常の走行実験は終わっており、次なる耐久テストに移っているのだ。



伊吹島の海岸線に並ぶ石仏は島四国と呼ばれ、八十八体が安置されている

エネルギー問題などから改めて、現在、大量輸送と定時輸送が確保されやすい鉄道路線への注目度が再び高まりつつある。さらに四国の場合、瀬戸大橋線は新幹線も走れる設計がなされている。新幹線が岡山を経由し四国へ乗り入れれば、観光面でも飛躍的な伸びが将来的に見込まれる。

人口減少に悩む四国の各都市は、それによって「観音寺市はもろろん、生き返るところがかなりあるのではないかと」白川市長は予測する。

また、市内に在住または勤務する男性と、女性(居住地・勤務地不問)が参加した《ふるさと恋愛応援プロジェクトはるこい》(平成23年11月)では、男性20名と女性19名が参加して6組のカップルが成立した。同様の条件で参加者を募った《クリスマス集いおいしクリスマス》(同12月)では、男性49名と女性50名が参加して、10組のカップルが成立

分かるように、観音寺市もまた「四国への」と呼ばれる立地にあり、高松・松山・徳島・高知のどこにも自動車で1時間以内に着くことができる。さらに鉄道の高速度化が実施されれば、交通の要衝としての観音寺市の実力はさらに万全のものとなる。確かに交流定住人口を安定的に増やすための、最も根本的な方法であることが分かる。  
「実は明治維新当時の人口を調べますと、四国において1万人以上の人口を擁していたのはほとんどが城下町なのです。その中で城



祇園祭の流れをくむとされる「ちょうさ祭」は各地区独自の太鼓台が魅力

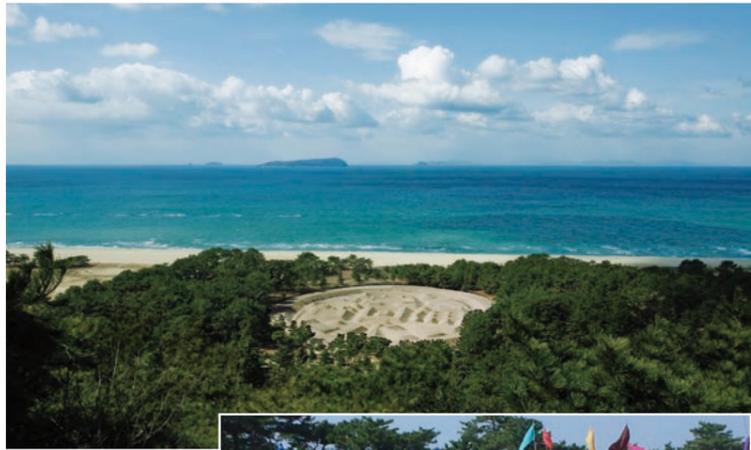
例えば今回はご紹介しきれなかったが、青森県のねぶた(ねぶた)祭りにも匹敵するといわれるクオリティを持つ「ちょうさ祭」、観音寺港からわずか25分である、伊吹いりこの日本一の生産地であると同時に歴史と民俗の宝庫でもある伊吹島、瀬戸内沿岸の美しい海

の気になってくれました」と苦笑するが、市長が誘致に全力を傾注した日本学生トライアスロン大会の開催に当たって、ロータリークラブを中心に市内の商業者が協力体制を組み、一般市民もまた積極的にボランティア参加を行ったりしてきた6年間の「下地」も、あるいはそのような機運の醸成の一助につながっているのではないだろうか。

の伊吹いりこや、レタス、いちご、セロリなどの優れた農産品のトップセールスで各地を訪問しているが、そのたびに痛感するのが年々厳しくなる産地間競争だ

という。

その厳しさの背景には、宣伝費用と比例しがちなブランド浸透力の差もあり、そういう意味における6大都市圏を擁する地域などとの格差は「いかんともしがたい」と嘆く。だがこれまで見てきたように、観音寺市には将来的にブレイクする可能性を持つパズルのピース(要素)が非常に多くある。



江戸時代制作説もあるが明治時代制作の信ぴょう性が高い銭形砂絵(年に2回、市民による手入れを実施)

また来年は伊吹島で瀬戸内国際芸術祭(伊吹島は7/20~9/1)が開催され、多くの観光客の訪れが予測される。また来年度から平成27年春完成予定の新市庁舎建設も始まる。観音寺市では今まさに、さまざまな要素が活気を帯びて躍動しつつあるといった印象だ。

(取材・文 遠藤 隆)



さぬきうどんのだしに不可欠なカタクチイワシでつくる「いりこ(煮干し)」(6~8月に収穫)

トを通る例が多くなった。さらに高速自動車道が四通八達し、航空路が整備されるにしたがって、近代以前の道路網の重要性は急速に薄れていくのが通例だ。

しかし、昔から四国へのそと呼ばれてきた観音寺市の、四国における距離的優位性はまだ生きている。現に道路網は前述のように国内の主要都市と直結しているし、例えば流通大手のファミリーマートの四国の物流拠点は観音寺市にある。大量の物資をいったん観音寺市の物流拠点に運び込み、そこから四国の各地区へ分配しているのだ。マーケティングリサーチにはひとときわ力を注ぐ流通大手が、物流拠点としての観音寺市の優位性を図らずも証明しているといえるだろう。

が加われれば「観音寺市のにぎわいにも大きな影響が出てくる。それだけでなく四国全体も活気づく」と白川市長は期待するのだ。

## 官民一体となって目指す 郷土のにぎわい

そうした外的要因とは別に、前述した交流定住人口の増加への自主的努力とともに、まちのにぎわいづくりについても、観音寺市では少しずつ状況が好転しつつある。時代の趨勢によって、郊外型の商業施設の優位性がさらに募っている半面、中心市街地で商店を営む市民の意識が強まりつつあるのだ。

平成17年度策定の「観音寺市中心市街地活性化基本計画(第1回変更)」に基づき、道路の拡幅やバリアフリー化など行政主導型のハード整備は徐々に整っていったものの、その新たな環境を生かすためのソフト面のノウハウや意欲が、民間事業者の間にはなかなか育たないくらいがあった。

しかし、平成23年度に香川県雇用促進事業(商店街等賑わいアップ事業)の助成を受けた頃から、市内の商業者が一致団結して事に当たる機運が芽生えた。そして同事業を活用して「まちなか活性プロジェクト」を発足。専門家を招いてまちづくりのワークショップを開催したり、市民を巻き込んださまざまな共同イベントを実施するようになった。

白川市長は「やっとなり商業者の皆さんが、そ